

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈共同研究プロジェクト紹介〉 消滅危機方言の調査  
・ 保存のための総合的研究  
奄美喜界島方言の母音の特徴について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木部, 暢子, KIBE, Nobuko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000698">https://doi.org/10.15084/00000698</a>

# 奄美喜界島方言の母音の特徴について

Vowel Features of Kikaijima Dialects in Amami, Japan

木部 暢子 (KIBE Nobuko)

## 1. はじめに

いま、世界は「消滅の危機に瀕した言語」に満ちている。アメリカの言語学者マイケル・クラウスによると、現在、世界に存在する 6,000 の言語のうち、20～50%が死滅寸前で 21 世紀中に消滅してしまい、40～75%の言語が「深刻ではないものの」危機に瀕しており、「安泰」なのは 5～10%の言語だけだという (マイケル・クラウス 2002: 171)。このような言語の危機的な状況に警鐘を鳴らすべく、ユネスコは 2009 年 2 月、消滅の危機の度合いの高い約 2,500 の言語のリストと、それらが話されている地域を示した地図からなる、Atlas of the World's Languages in Danger (世界消滅危機言語地図) を発表した。日本に関しては、アイヌ語、沖縄県の八重山語、与那国語、沖縄語、国頭 (くにながみ) 語、宮古語、鹿児島県・奄美諸島の奄美語、東京都・八丈島などの八丈語がこの中に含まれている<sup>1</sup>。

このような日本の消滅危機方言をできるだけ多く記録し、その記録を後世に残すことを目的として、2009 年に「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」プロジェクト (略称「危機方言」) を開始した。このプロジェクトでは、共同研究員がそれぞれのフィールドで行なう調査・記録と並行して、共同研究員および大学院生、ポスドクなどの若手研究者が一地域に集まって、その地域の方言の調査・記録を集中的に行なう合同調査を実施している。これまで調査を実施した地域は、鹿児島県大島郡喜界町 (2010 年 9 月)、沖縄県宮古島市 (2011 年 9 月) の 2 地域である。本稿ではこのうち、鹿児島県大島郡喜界町の合同調査のデータから、その一部を報告する。

## 2. 喜界島方言の地域差について

喜界島は、周囲 48.6km、人口約 8,000 人の小さな島だが、方言はバリエーションに富んでいる。大きくは、北部の小野津 (おのつ)、志戸桶 (しとおけ) の方言とそれより南の諸方言に分けることができる (図 1, 2)。北部と南部の違いは、例えば、北部の小野津や志戸桶では、「鼻」を [pana], 「肘」を [pizi] のように発音するのに対し、南部の湾 (わん) や中里 (なかざと) では、「鼻」を [hana], 「肘」を [çizi] のように発音する現象などに見られる。よく知られているように、日本語史では、古代日本語のハ行子音を p と推定して

<sup>1</sup> ユネスコ担当者によると、日本では八重山語、与那国語などが方言として扱われているが、国際的な基準だと独立の言語と扱うのが妥当と考えたという (朝日新聞 2009 年 2 月 20 日夕刊)。

いる。奄美・沖縄方言の p 音は、その証拠の一つとしてあげられるが、喜界島北部方言の p も、古代日本語の特徴を今に伝えるものである。それに対し、喜界島南部方言では、本土方言と同じようにハ行子音が h に変化している。小野津、志戸桶、塩道（しおみち）<sup>2</sup> では、変化の途中の  $\phi$  も聞かれる。



図1 喜界島の位置



図2 調査地点と方言区画

母音の種類と発音のしかたも、北部と南部で大きく違っている。例えば、北部の小野津や志戸桶では、7種類の母音が使われているが、小野津、志戸桶以外の喜界島南部方言では、5種類の母音が使われている。奄美の他の地域に目を向けると、奄美大島、加計呂麻、徳之島では、喜界島北部と同じ7母音、沖永良部、与論では喜界島南部と同じ5母音が使われている。このように、喜界島は奄美諸方言の母音のバリエーションを一つの島のなかに持っていて、ちょうど奄美諸島の縮図のような様相を呈している。本稿ではこのような喜界島方言の母音の地域差を見ることにより、母音のバリエーションがどのようにして形成されたのかについて考えてみたい。

### 3. 2010年喜界島調査について

調査は2010年9月10日～9月14日に行なった。調査地点は喜界島の10集落（図2）、話者は各集落4～12名の計81名、調査者は35名（末尾参加者名簿参照）、調査項目は「基礎語彙」「文法」「談話」の3種類である。本稿ではこのうち、小野津、志戸桶、塩道、阿伝（あでん）、湾、中里の6地点（図2の下線の地域）の「基礎語彙」の調査データを使用する。なお、詳細については『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 喜界島方言調査報告書』（国立国語研究所共同研究報告 11-01）を参照されたい。

<sup>2</sup> 塩道方言は、北部的な要素と南部的な要素を持っている。例えば、ハ行子音が p で現れる点は北部的だが、母音の種類が5種類である点は南部的である。注3に述べるように、中本（1976）では中舌性母音の存在が報告されているが、今回の調査では、塩道には中舌性母音が現れなかった。本稿では、このような母音の特徴を重視して、塩道方言を南部方言に位置づけた。

#### 4. 喜界島方言の母音に関するこれまでの研究

さきに、喜界島北部では7種類の母音が使われ、南部では5種類の母音が使われると述べたが、このことは、以前からすでに報告されていた。中本（1976）によると、このような母音の種類の違いは、次のようにして成立したという。まず、琉球祖語の母音体系は/i, u, e, o, a/の5母音体系だった。そこへ連母音 au の融合によってɔ: が生まれ、このɔ: に押される形で本来の o が u に変化した。これと並行して、前舌母音でも連母音 ai の融合によって ε: が生じ、ε: に押される形で本来の e が e → ë → i のように変化した（図3①）。ɔ: と ε: はその後、o:, e: として定着し、/i, i, u, e, o, a/の6母音体系ができあがった。これにさらに連母音 ae から生まれた ë: が加わったのが、北奄美の7母音体系/i, i, u, e, ë, o, a/である（図3②）。その後、南奄美では i が i に合流し、ë: が e: に合流して、/i, u, e, o, a/の5母音体系ができあがった（図3②, ③）。

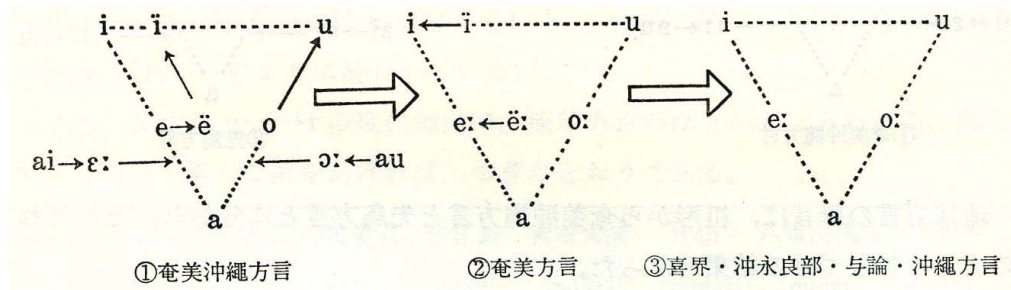


図3 奄美沖縄方言の母音の推移（中本 1976: 110 より）

#### 5. 2010年の調査にみる喜界島諸方言の母音の特徴

2010年の調査でも、このような状態は、大きくは変わっていない。すなわち、母音の種類は喜界島北部が7種類、南部が5種類である。ただし、今回の調査では南部方言でも i が現れることがあった。本稿ではこの i を ɪ で表記する。その理由は、今回の調査の範囲では、従来 i と報告されてきた母音がそれほど強い中舌性で発音されていなかったからである。従って、今回の調査で得られた喜界島方言の母音は、北部方言が/i, ɪ, u, e, ë, o, a/の7種類、南部方言が/i, (ɪ), u, e, o, a/の5(6)種類ということになる。

これらの詳細を見る前に、喜界島の北部と南部でこれらの母音がどのように対応するのか、また共通語の母音とどのように対応するのかを大まかに押さえておこう。それを示したのが表1である。先の中本（1976）の引用にもあったように、喜界島北部では、ai, ae, ou のような連母音が e:, ë:, o: として定着したのに加え、共通語の i と e に対応する母音が i と ɪ で区別を保っている。そのために、母音の種類が7種類と多くなっている。喜界島南部方言では、北部方言の i と ɪ が i に統合し、e: と ë: が e: に統合して5母音になっている。

ただし、実際にはこの表どおりにいかない場合も多い。特に、前後の子音や母音の影響を受けて母音の発音が変化しているような場合は、表1のような対応関係のとおりにならない。

表1 共通語と喜界島方言との母音の対応関係

共通語	i	e	u, o	a	ai	ae	ou
喜界島北部	i	ɪ	u	a	e:	ë:	o:
喜界島南部	i	i (i)	u	a	e:		o:

詳細は後に述べることにして、ここではまず、喜界島方言の母音の問題点を整理しておこう。問題となるのは次の点である。①北部と南部の違いが如何にして生じたか、つまり、南部方言で*i*と*ɪ*の統合が如何にして進んだか、②同じく南部方言で*e:*と*ë:*の統合が如何にして進んだか。特に、今回の調査では、直前の子音の種類によっては、南部方言でも規則的に*ɪ*が現れることが確認された。また、*e:*と*ë:*の区別にも、直前の子音が関係している。以下では、このような*i*と*ɪ*の区別と統合、*e:*と*ë:*の区別と統合に焦点を当てて、喜界島方言の母音の地域差とその特徴について述べてみたい。

### 5.1 喜界島方言の*ɪ*と*i*

まず、喜界島北部でも南部でも*i*と発音される音の例を見てみよう。表2がそのような音を持つ単語の例である。このような音は、共通語の*i*に対応している(表1参照)。なお、表中の記号は、次のような意味を表す。--:未調査。NR:調査したが語形が得られなかった。/:話者による発音の違い。~:同一話者での発音の揺れ。また、見やすくするために、*ɪ*の母音を持つ語に網掛けをする。

表2では、志戸桶の[mɪ:](実)、[ʔami] (網)が例外的に*ɪ*になっている。志戸桶では、他にも[mɪdzu] (水)、[mumi] (粉)、[cɪrami] (虱)のような例があり、*m*の後では*i*が*ɪ*になる傾向がある。

次に、喜界島北部方言で*ɪ*、南部方言で*i*と発音される音の例を見てみよう。このような音を含む語を表3にあげる。これらは、共通語の*e*に対応する母音である(表1参照)。

表3を見ると、喜界島南部方言でも、*ɪ*が結構、使われているのに気がつく<sup>3</sup>。特に、中里では、同一話者の、同一語の発音に*i*と*ɪ*の両方が現れ、*i*と*ɪ*がかなり揺れている。また、直前の子音が*n*の場合は、湾でも*ɪ*が普通に使われている。じつは、子音*n*の後の*ɪ*(*i*)については、これまでもいくつか指摘があった。例えば、中本(1976:340)は、湾の*nɪ*について、次のように述べている。

湾方言でもかつてエ段が中舌母音であったおかげを残している。すなわち、[ʔami] (雨)と[ʔami] (網)、[k<sup>2</sup>umi] (組)と[mami] (豆)はいずれも区別がなく*mi*に統合しているが、つぎのような語においては*nɪ*と*ni*とでかすかに区別を保っている。しかし、これらもぞんざいな発音では区別を失っている。

<sup>3</sup> 中本(1976:345)では、塩道方言で*i*を使うとの報告があるが、今回の調査では、塩道の6人の話者は全員、*i*(または*i*)を持っていなかった。塩道ではこの30年の間に、*i*→*i*の変化が進んだようである。

表2 喜界島の北部でも南部でも i と発音される母音（共通語の i に対応する母音）の例

単語	昼	肘	首	実	網	血	道
直前の子音	[p,ç,c]	[p,ç] [z]	[b]	[m]	[m]	[tç]	[m] [tç]
小野津	p <sup>2</sup> iru	pizi~φizi	nubui (喉首か)	mi:	ami	tç <sup>2</sup> i:	mitçei
志戸桶	piru	pizi	k <sup>2</sup> ubi	mɪ:	ʔami	tçi:	mitçei
塩道	piru	pizi	k <sup>2</sup> ubi	mi:	ami	tç <sup>2</sup> i:	mitçei
阿伝	çinma:	çizi	nubi: (喉首か)	mi:	ami	tçi:	mitçei
湾	maçinma	çizi	k <sup>2</sup> ubi	mi:	ʔami	tç <sup>2</sup> i:	mitçei
中里	çiru	çizi	k <sup>2</sup> ubi	mi:	ʔami	tç <sup>2</sup> i:	mitçei

単語	荷	鬼	傷	時	釘
直前の子音	[n <sup>2</sup> ]	[n <sup>2</sup> ]	[k]	[k]	[n <sup>2</sup> ,g]
小野津	n <sup>2</sup> imutsu	ʔun <sup>2</sup> i	k <sup>2</sup> izu	tuki	k <sup>2</sup> un <sup>2</sup> i
志戸桶	n <sup>2</sup> i:	ʔun <sup>2</sup> i	k <sup>2</sup> izu	tuki	k <sup>2</sup> un <sup>2</sup> i
塩道	n <sup>2</sup> i:	ʔun <sup>2</sup> i	k <sup>2</sup> izu	NR	k <sup>2</sup> un <sup>2</sup> i
阿伝	--	un <sup>2</sup> i	tçidu	tuki	k <sup>2</sup> ugi
湾	n <sup>2</sup> i:~n <sup>2</sup> imutu	on <sup>2</sup> i	tçidu	NR	--
中里	n <sup>2</sup> i:	ʔun <sup>2</sup> i	tçizu	--	k <sup>2</sup> un <sup>2</sup> i

表3 喜界島の北部で i, 南部方言で i と発音される母音（共通語の e に対応する母音）の例

単語	屁	目	雨	豆	手	表
直前の子音	[p,φ,ç]	[m]	[m]	[m]	[t]	[t]
小野津	pi:~φi:	mɪ:	ami	mami	ti:	umuti
志戸桶	pi:	mɪ:	ʔami	mami	ti:	umuti
塩道	pi:	mi:	ami	mami	ti:	umuti
阿伝	pi:~φi:	mi:	ami	mami	ti:	ʔumuti
湾	çi:	mi:	ʔami	mami	ti:	ʔumuti
中里	çi:	mi:	ʔami	mami~mami	ti:~ti:	ʔumuti

単語	筆	根	骨	胸	怪我	情け
直前の子音	[d]	[n]	[n]	[n]	[k]	[k]
小野津	pudi	nɪ:	puni~φuni	muni	kiga	nasaki
志戸桶	φudi	nɪ:	punɪ:	muni	kiga	nasaki
塩道	pudi/φudi	hi <sup>n</sup> pin <sup>2</sup> i: (木の鬚)	φuni:	muni	kiga	nasaki
阿伝	φudi	ni:	φuni	muni	--	NR
湾	φude (共通語的)	nɪ:	φuni	muni	--	NR
中里	φudi	nɪmutu	φunɪ	muni	kiga~kiga	--



{	[mani] (真似)	[tani] (種)	[ɸuni] (舟)	[muni] (胸)
}	[muni] (麦)	[k <sup>2</sup> uni] (釘)	[ʔuni] (鬼)	

また、輝 (1981: 56) は、中里の ni, ni について、次のように述べている。

(中里方言の) ni は [ni] (例, ni: [ni:] 〈根〉, hani [hani] 〈羽〉) であるが、母音 [i] は、名瀬方言をはじめ奄美大島本島方言にみられる中舌母音 [i] ほど中舌的ではなく、それよりは幾分前寄りに発音され、[i] と統合寸前の母音である。このような音声事実は、過去においてこの母音 [i] が、中舌母音 [i] であったことを示唆するものであり、[i] 母音のもつ中舌性は痕跡的な非示唆的<sup>4</sup>な要素と考えられ、i とみなす。したがって、[ni] と [ni] (例, niŋgin [niŋgin] 〈人間〉, ni: [ni:] 〈根〉) 両音節の示差的特徴は、子音の口蓋音化の有無にあると音韻論的にみなすことができる。

中本 (1976) や輝 (1981) が言うのは、以前は湾や中里でも共通語の e に対応する母音が i で発音されていたが、i → i の変化が進んだ結果、かつての中舌母音の「おもかげ」「痕跡」が n の後に残ることになった、ということである。

では、なぜ、n の後で中舌母音の「おもかげ・痕跡」が残ったのだろうか。じつは、子音が n の場合に中舌母音の「おもかげ・痕跡」が残るという現象は、湾や中里だけでなく、塩道や阿伝にも見られる。ただし、塩道や阿伝の場合、母音ではなく子音に「おもかげ・痕跡」が残っている。例えば、表 2 と表 3 から n の後の i の例を拾うと、共通語の「ニ」に対応する音では n の子音が口蓋化しているのに対し、共通語の「ネ」に対応する音では n の子音が口蓋化していないことに気がつく。阿伝の話者はこの違いを明確に意識していて、「荷」と「根」は発音が違うと何度も説明してくれた。

	「荷」	「鬼」	:	「根」	「骨」	「胸」
塩道	n <sup>h</sup> i:	ʔun <sup>h</sup> i	:	(hin pin <sup>h</sup> i:)	ɸuni:	muni
阿伝	n <sup>h</sup> i:	un <sup>h</sup> i	:	ni:	ɸuni	muni

阿伝方言に関しては、岩倉市郎 (1941) 『喜界島方言集』の凡例の部分に、「「ネイ」は [ni] で荷物等の「ニ」と区別がある」(岩倉 1941: 18) という説明がある。阿伝方言では 50 年前からすでに、口蓋化した「ニ」と口蓋化しない「ネイ」が対立する状態だったようである。

また、湾方言に関しては、大野 (2002: 6) の次のような報告がある。

この音声実態は以下 (湾方言の語例) に示すとおり母音の実質による対立というよりは、子音部分の口蓋化の有無による対立と見なすことができる。

<sup>4</sup> 「非示唆的」は原文のまま。「非示差的」の誤植か。

ニ : ji: (荷)      niku (肉)      kuɲi (釘)  
 ネイ : ni: (根)      hani (金)      muni (胸)

今回の我々の調査では、湾方言の「荷」と「根」は、[nʲi:] (荷) と [nɪ:] (根) のように、子音の口蓋化の有無だけでなく、母音も異なると観察している。

ところで、子音の口蓋化というと、思い浮かぶのは、歯茎音系列の子音が i の前で口蓋化を起こすという事実である。例えば、共通語の「チ」は [tɕi] のように子音が口蓋化している (同時に破擦音化している)。喜界島方言でも、共通語の「チ」, 「ヂ」に対応する音は、[tɕʰi], [ɕi] のように口蓋化している。これに対し、共通語の「テ」, 「デ」に対応する音は、喜界島北部方言では [ti], [di], 南部方言では [ti], [di] のように子音が口蓋化していない。表 4 に歯茎音系列の子音の口蓋化, 非口蓋化による音の区別をまとめておこう。

表 4 歯茎音系列の子音の口蓋化, 非口蓋化による音の区別

共通語母音	i			e		
単語	血	肘	荷	手	筆	根
直前の子音	[tɕ]	[ɕ]	[nʲ]	[t]	[d]	[n]
北部 (小野津・志戸桶)	tɕʰi:	pizi	nʰi:	ti:	ɸudi	ni:
南部 (塩道・阿伝)	tɕʰi:	pizi/ɕizi	nʰi:	ti:	pudi/ɸudi	ni:
南部 (湾)	tɕʰi:	ɕizi	nʰi:	ti:	ɸude	nɪ:
南部 (中里)	tɕʰi:	ɕizi	nʰi:	ti:~ti:	ɸudi	nɪmutu

表 4 によると、子音が歯茎音の場合、喜界島北部方言でも南部方言でも、口蓋化子音が共通語の i の音節に、非口蓋化子音が共通語の e の音節に対応している。湾方言や中里方言で n の後に中舌母音が残った理由も、n の後では nʲi (ニ) と nɪ (ネ) のように「口蓋化子音 + i」, 「非口蓋化子音 + ɪ」がセットとなって、音が区別されていたからではないかと考えられる。ちなみに、歯茎音以外の子音の場合には、口蓋化子音と非口蓋化子音が対立しない。そのため、南部方言では「実」と「目」, 「網」と「雨」がそれぞれ同じ発音になり、「昼」の「ヒ」と「屁」の「へ」が同じ発音になっている (表 5)。

喜界島諸方言の i と ɪ の状況を以下にまとめておこう (5.4 の図 4 も参照)。

- ①喜界島北部の小野津と志戸桶の方言では、すべての子音の後で i と ɪ が対立する。i は共通語の i に、ɪ は共通語の e に対応している。これが喜界島の古い形である。
- ②喜界島南部の中里方言では、揺れない i (共通語の i に対応) と揺れのある i~ɪ (共通語の e に対応) が対立している。ただし、n の後では ɪ に揺れが現れない。口蓋化子音、非口蓋化子音と母音 i, ɪ が組み合わせることによって、nʲi, nɪ の形で音が区別されていたために、nɪ の中に ɪ が保たれたのだと考えられる。
- ③喜界島南部の湾方言では、i と ɪ が n の後を除いて対立しない。n の後では中里と同じ理



表5 歯茎音以外の子音

共通語母音	i			e		
単語	昼	実	網	屁	目	雨
直前の子音	[p,ç,ç]	[m]	[m]	[p,φ,ç]	[m]	[m]
北部 (小野津)	pʰiru	mi:	ʔami	pɪ:~φɪ:	mi:	ʔami
南部 (塩道・阿伝)	piru	mi:	ami	pɪ:~φɪ:	mi:	ami
南部 (湾)	(maçinma)	mi:	ʔami	çi:	mi:	ʔami
南部 (中里)	çiru	mi:	ʔami	çi:	mi:	ʔami

由で, nɪ と mɪ の中に痕跡的に i と ɪ の対立が残っている。

- ④塩道と阿伝の方言では, すべての子音の後で i と ɪ が対立しない。子音が n の場合には, 口蓋化子音 (nʲ) と非口蓋化子音 (n) の違いの中に i と ɪ の対立の痕跡が残っている。n 以外の歯茎音の場合も, tç と t, z と d の違いの中に i と ɪ の対立の痕跡が残っている。

## 5.2 喜界島方言の e: と ë:

次に, e: と ë: について見てみよう。従来, 奄美方言の e: は ai 連母音に由来し, ë: は ae 連母音に由来すると言われてきた。しかし, 今回の調査では, 必ずしもそのようになっていない (表6, 7)。例えば, se: (酒), de: (竹) は子音 k の脱落により, 次のような変化をたどって生じた語形だが, ë: ではなく e: になっている。また, 「苗」も ae に由来しているが, ë: ではなく e: になっている。

酒    \*sake → \*saxe → \*sae → \*së: → se:  
 竹    \*dake → \*daxe → \*dae → \*dë: → de:

では, 北部方言の ë: と e: の違いは, 何によるのだろうか。表7を見ると, ë: になるのは, ae に由来する母音のうち, 直前の子音が両唇音の p, m, φ のものである (më:tea:, më:tçi: (額) の語源はよく分からないが, 北部方言で母音が ë: になっているところを見ると, 「前額」か?)。このような状況からすると, 喜界島北部でも ë: → e: の変化が進みつつあり, 直前の子音が両唇音のときに限って, ë: が保たれた, というこのようである。

## 5.3 その他の母音

それ以外の母音については, 特に大きな問題はない。表1に示したように, 喜界島方言の a は共通語の a に対応し, 喜界島方言の u は共通語の u と o に対応している。u について, ひとつ触れておかなければならないのは, 古典語の「オ」と「ヲ」の区別を残している点である。喜界島方言ではア行の「オ」に対応する音が ʔu と発音され, ワ行の「ヲ」に対応する音が wu ないし gu と発音される。「オ」と「ヲ」は, 中央日本語では11世紀ごろ1つに

合流したと言われているので、喜界島方言は、11世紀以前の日本語の特徴を残しているということになる（ただし、これは琉球語に一般的に見られる特徴で、喜界島方言だけの特徴というわけではない）。表 8、9 に例をあげておこう。

表 6 北部方言でも南部方言でも e: と発音される母音の例

単語	酒	腕	竹	兄弟	苗
直前の子音	[s]	[t]	[d]	[d]	[n]
小野津	se:	udi	de:	k <sup>h</sup> o:de:	ne:
志戸桶	se:	gute: (五体)	de:	--	ne:
塩道	se:~œe:	gute: (五体)	de:	co:de:	ne:
阿伝	se:	ti: (手)	de:	so:de:	ne:
湾	se:	ʔudi	de:	so:de:	nae
中里	se:~œe:	gute: (五体)	de:	so:de:	--

表 7 北部方言で ë:, 南部方言で e: と発音される母音の例

単語	蠅	前	額	南風 (はえ)
直前の子音	[p,ɸ,h]	[m]	[m]	[ɸ,p]
小野津	pë:	më:	më:tca:	ɸe:nici (はえにし)
志戸桶	ɸë:~pë:	më:	më:tci:	ɸënkadzi (はえの風)
塩道	he:	me:	mettci:	pe: (はえ)
阿伝	pe:~ɸe:	me:	--	ɸe: (はえ)
湾	he:	me:	mittce:	henkadi: (はえの風)
中里	he:	me:	mittce:	hë: (はえ)

表 8 古典語のワ行のヲに由来する音 (wu または gu に網掛けをする)

単語	夫	女	叔母	叔父	おととい
小野津	utu	unaŋu	uba:	udzi:	ʔutti:
志戸桶	utu	unaŋu	ʔubakki(:)~ʔuba	ʔunmuŋi:	wutti:
塩道	wu <sup>2</sup> u	wunagu	ʔanma:~ʔani:	k <sup>2</sup> in <sup>2</sup> ka:	wutti:
阿伝	gutu	gunau	guba	gudzi	--
湾	wutu	wunagu	wuba:	wudzi:	wutti:
中里	ʔutu	ʔunagu	ʔoba:~ʔuba	ʔudzi:	ʔutti:

表9 古典語のア行のオに由来する音

単語	奥	音	鬼	親
小野津	uku	ʔutu	ʔunʲi	tuzitu (tuzi(妻)・utu(夫))
志戸桶	ʔukʰu	ʔutu	ʔunʲi	ʔuja
塩道	ʔuku	utu	ʔunʲi	ʔuja
阿伝	ʔuku	utu	unʲi	--
湾	NR	ʔutu	onʲi	uja
中里	ʔuku	ʔutu	ʔunʲi	ʔuja

## 5.4 喜界島諸方言の母音音素目録

最後に、喜界島諸方言の母音体系を整理しておこう。

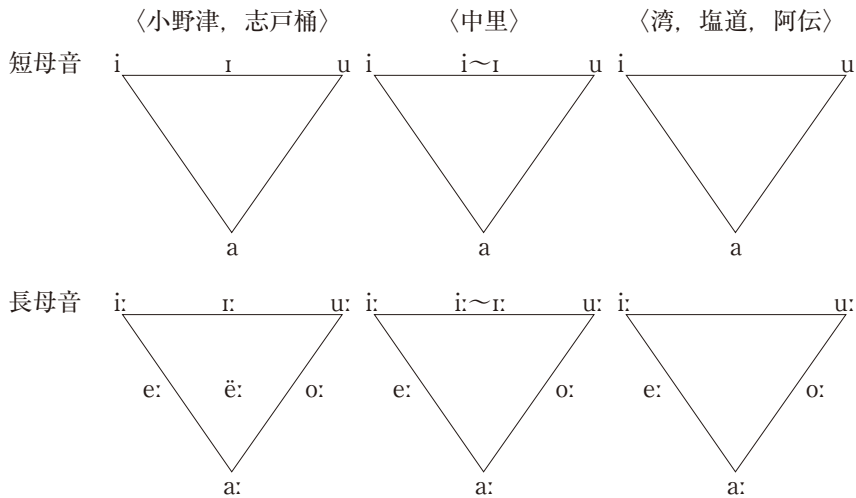


図4 喜界島諸方言の母音体系

北部の小野津、志戸桶は、4つの短母音/i, ɪ, u, a/と7つの長母音/i:, ɪ:, u:, e:, ë:, o:, a:/を持ち、南部の湾、塩道、阿伝は、3つの短母音/i, u, a/と5つの長母音/i:, u:, e:, o:, a:/を持っている。中里については、揺れないiと揺れのあるi~ɪを別の母音と考え、4つの短母音/i, i~ɪ, u, a/と6つの長母音/i:, i:~ɪ:, u:, e:, o:, a:/を設定している。母音のリストだけを見ると、従来の報告とあまり違いがないが、リストの作成のためには、直前の子音との関係を整理する必要があることを本稿では見てきた。特に、nの口蓋化については、各地の状況をもういちど調べてみる必要があるようである。

喜界島はそれほど大きな島ではないが、見てきたように、方言のバリエーションが豊富で

ある。奄美・沖縄の島はどこも同じで、島内の方言の差が大きい。調査しなければならない地点は多く、時間との闘いである。

#### ●付記●

- ・2010年の喜界島方言合同調査の参加者は以下のとおりである（50音順）。  
青井隼人，井上文子，上野善道，大西拓一郎，小川晋史，荻野千砂子，金田章宏，狩俣繁久，川瀬卓，姜英淑，木部暢子，儀利古幹雄，久保蘭愛，窪菌晴夫，佐藤久美子，重野裕美，下地賀代子，白田理人，盛思超，高山林太郎，田窪行則，竹田晃子，竹村亜紀子，當山奈那，仲原穰，新永悠，新田哲夫，平子達也，平山真奈美，トマ・ペラルル，松本泰丈，松森晶子，三井はるみ，山田真寛，ウエイン・ローレンス
- ・調査の際には，喜界町教育委員会，喜界町のみなさんに大変お世話になりました。この場を借りて感謝申し上げます。

#### ●参考文献●

- 岩倉市郎（著），柳田国男（編）（1977）『喜界島方言集（復刻版）』東京：国書刊行会（1941年初版）。
- 木部暢子・窪菌晴夫・下地賀代子・ローレンス ウエイン・松森晶子・竹田晃子（2011）『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 喜界島方言調査報告書』国立国語研究所共同研究報告 11-01。
- マイケル・クラウス（2002）「言語の大量消滅と記録—時間との競争」宮岡伯人・山崎理（編），渡辺己・笹間史子（監訳）『消滅の危機に瀕した世界の言語—ことばと文化の多様性を守るために』170-206。東京：明石書店。
- 中本正智（1976）『琉球方言音韻の研究』東京：法政大学出版局。
- 大野眞男（2002）「奄美方言における中舌母音の歴史的な重層性」『国語学研究』41: 1-10。
- 輝博元（1981）「喜界島・中里方言の音韻」『島田勇雄先生古稀記念 ことばの論文集』横 26-59，東京：明治書院。

《要旨》 鹿児島県喜界島方言は，ユネスコが発表した消滅危機言語のリストの中の奄美語に属する方言である。国語研プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」では，2010年にこの方言の合同調査を行なった。本稿はその調査データから，喜界島方言の母音の特徴について報告するものである。概略は次のとおり。(i)喜界島北部方言は，7つの母音（i, ɪ, u, a, e, ë, o）を，南部方言は5つの母音（i, u, a, e, o）を持っている。この結果は40年前の報告と大差ない。(ii)ただし，[n]の後では南部の方言でも [ɪ] が現れる。このことは，前接する子音によって母音変化の速度に違いがあったことを示している。

**Abstract:** Kikaijima dialects belong to the Amami dialect group, which was designated as an endangered language by UNESCO. We investigated these dialects in 2010. In this paper, we report on the vowel features of Kikaijima dialects based on the data we collected. We can summarize as follows. (i) Northern Kikaijima dialects have seven vowels (i, I, u, a, e, ë, o), and southern Kikaijima dialects have five vowels (i, u, a, e, o). This result is almost the same as what was reported forty years ago. (ii) However, [ɪ] appears after [n] even in southern Kikaijima dialects. This suggests that the vowel shift advanced at different speeds depending on the preceding consonant.

## 木部 暢子 (きべ・のぶこ)

国立国語研究所時空間変異研究系教授，副所長。博士（文学）（九州大学）。純真女子短期大学講師，福岡女学院短期大学講師，鹿児島大学法文学部教授を経て，2010年4月より現職。

主な著書・論文：『西南部九州二型アクセントの研究』（勉誠出版，2000），『方言の形成』（共著，岩波書店，2008），『鹿児島県のことば』（共著，明治書院，1997），『イントネーションの地域差—質問文のイントネーション—』（『方言の発見 知られざる地域差を知る』ひつじ書房，2010），『鹿児島方言—南島の難解な方言—』（『日本の危機言語』北海道大学出版会，2011）。

社会活動：日本語学会理事，日本音声学会評議員，日本方言研究会世話人，日本学術会議連携会員。

### 基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」 プロジェクトリーダー 木部暢子（国立国語研究所 時空間変異研究系 教授）

#### プロジェクトの概要

グローバル化が進む中，世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009年のユネスコの発表では，アイヌ語のほか，沖縄県のはほぼ全域の方言，鹿児島県の奄美方言，東京都の八丈方言が危険な状態にあると指摘されている。本プロジェクトでは，これら危機方言の調査を行ない，その特徴を明らかにすると同時に，言語の多様性形成のプロセスや言語の一般特性の解明にあたる。また，方言を映像や音声で記録・保存し，それらを一般公開することにより，危機方言の記録・保存・普及を行なう。